

書 評

小林多寿子著

『物語られる「人生」
—自分史を書くということ—』

渡邊 徳子*

義務教育が当たり前となった現在、日本に住む多くの人びとは、文章の巧みさはともかくとして、最低限のことは「書く」ことができる能力を身に付けている。

本書は自分史にまつわる研究成果であると同時に、このような社会になったからこそ可能となったフィールドワークの記録ともいえる。1997年の出版であり、新しいものとは言い難いが、口述が主な手段ともされてきた民俗学にとって、この社会学の書籍から学ぶことは多い。

あとがきにも述べられているが、著者である小林多寿子が「自分史への関心の芽生え」を持つ契機となったのは、大学院生の頃にライフヒストリー・インタビューの機会に恵まれたことだった。「口頭でつむぎだされる話言葉の豊かさ」と不思議さに触れたことから、著者の「人生の物語」を聞き歩くことは始まり、これまでも口述資料とその方法論に関する優れた論文〔小林1995〕や共訳〔米山・小林1993〕などを発表している。

そういった著者の関心はいつしか、現代社会において、「自分史」という形で人生を記した人びとや、それを手伝う人びとの、「書き言葉」(自分史という作品)と「話言葉」(インタビューから生まれたもの)の融合、すなわち多面的に「物語られる「人生」」へと向けられた。

本書は次のような構成をとる。

序 自分史を書く人たちの系譜

I ともに書く自分史

1 転機となった自分史

2 自分史コミュニティーの人たち

3 文章運動から生まれた自分史

II 物語産業から生まれた自分史

1 物語産業の誕生

2 一九八〇年代の自分史

3 自分史ブームのいない手たち

III 地域共同体と自分史

1 沖縄の自分史

2 自分史のなかの戦争

3 長寿者の自分史

IV 読者をえた自分史

1 『自分史ノート』から生まれた自分史

2 父と私の自分史

3 「自分探し」の自分史

V 賞をめざした自分史

1 北九州市自分史文学賞

2 書くことへのステップとなった自分史

3 若い人の自分史

VI 自分史による自己表現の時代

1 状況の共時化する時代

2 自己の物語をつむぐ

3 自分史の未来へ

あとがき

自分史ブームとされる1980年代以降、多くの人びとが、回顧的に、あるいは告白的に、その「人生」を書き、自費出版し、本にすることをはじめた。それを著者は「『人生』のカミングアウト」と捉えている。この時期に「人生の物語」が「自分史というスタイル」で、綴られて公にされる意義はどこにあり、またそういった現象を生み出した社会背景はどういうものなのかを探るのが本書の目的である。

イギリスの社会学者ケン・プラマーによる、「ストーリーの社会学」という次の視点は、自分史という「人生」のストーリーを考える上でも取り入れることができるという。

・ストーリーはどのように生まれ、聞かれ、読まれるのか。

・語られたものは、どのような社会的役割をは

*神奈川大学歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

たすのか。

- ・ストーリーの意味はコンテキストによって変化し、揺れていくものではないのか。
- ・ストーリーは、あるコミュニティ（厳密には、解釈的コミュニティ）によって、語られ方も聞かれ方も異なるのはなぜなのか。

第一章（Ⅰ）では、「ともに書く自分史」をとりあげる。橋本義夫のおこした「ふだん記」運動に触発され、自分史を書いたのを契機に、自治体などの教室で講師を勤め、他の人が書くのにも関わってきた鈴木政子に注目している。「彼女は、いつもだれかとともに文章を書いてきた」。

また著者は、鈴木政子が関わった自分史教室（講座）から発展したサークルをいくつか訪問し、ともに書く仲間がいることのメリット（締め切りがあるゆえのメリハリ、読み合う仲間がいることなど）について、聞き出している。ブームの背景には、「ふだん記」運動や、自分史教室、サークルの展開など、「自分の体験を書く、綴るという文章表現の文化史」があるという。

第二章（Ⅱ）では、「物語産業から生まれた自分史」をとりあげる。自分史を「紙の墓標」と命名し、大阪市で「自費出版センター」を手掛け、『自分史マニュアル メモリーノート』（以下、『自分史ノート』とする）を考案し売り出した福山琢磨、つまり物語産業を支える業界人に注目している。物語産業の商品には、印刷製本という具体的な作品化（本の制作）と同時に、バインダー式で書き込み可能な『自分史ノート』や自分史教室など、書けるように促してくれるものも含まれているという。書き手は、その消費者であると同時に、作品を産出する生産者でもある。

著者はここで、無造作に1980年代の自分史を60冊、選択・分析し、書き手の多くが男性であり、執筆当時で65歳以上の戦争体験世代が多いことを明らかにしている。また多くは、歳祝いや家族の死などを契機に、それまでの道程を周囲や子孫に残し伝えることを望み、挑んでいる

という。

第三章（Ⅲ）は、「地域共同体と自分史」として、「ある特有の歴史的背景と文化をもった地域共同体から生まれる自分史」もあるはずだとし、沖縄の事例をとりあげている。

それらには、地上戦やアメリカによる信託統治時代など、ここだけに共有される歴史（「世」の変遷）が反映されているとした。また、長寿者のお祝いの席で配られるものも多く、高齢のために書くことが困難な場合には、家族が綴っているものもあるという。

これらの多くは、沖縄には一ヶ所しかない自費出版センターから出版されており、物語産業の地方への進展の影響についても述べられている。

第四章（Ⅳ）では、「読者をえた自分史」についてとりあげる。多くの書き手は、その作品が読まれることを期待しているという。福山琢磨は出版を手掛けると同時に、「自費出版された本の図書館」をつくり、さらには、「止まり木」という読書希望者（読み手という消費者）のもとへと自分史が順次郵送され、各読み手による感想文が一年後に書き手のもとに届くという「本の渡り鳥」という自分史の回覧読書システムを考案した。こうして、面識の無い幅広い読者に読まれることで、書き手は手ごたえを得ることができるという。

また、この章では1990年代に出版された、10代で戦争体験をした人びとの自分史をとりあげ、内容が戦争体験についての「記録」というよりも、「高度経済成長のなかで仕事をしてきた人たちの「軌跡を綴る」ものへと移行しつつあることを指摘している。

第五章（Ⅴ）では、「賞をめざした自分史」をとりあげている。1989年より「自分史文学賞」が北九州市に設立され、受賞作品は出版されるようになった（その後、日本自分史学会による日本自分史大賞も設立されたという）。応募作品は毎年400点から500点になり、自分史を評価されたいという意識の高さがうかがえるものになっ

ている。

ここでは29歳、43歳という、書き手としては極めて若い人の作品と動機に注目する。自分史に対して、長年の道程を書くだけでなく、ある一時期の事柄を書くのもよいという広義の意味が与えられ、さらには経験を綴ることの意味が年齢を越えて広がっていることを明らかにしている。

第六章(VI)は、「自分史による自己表現の時代」として、自伝の大衆化ともいべき現象を捉えている。自分史は、すなわち「自叙伝」と同じものであるが、自伝がエリートのもので捉えられるのに対し、自分史は「ふつうの人」が書くものと捉えられているという。

また、書ける、出版できるという背景には、生活水準の向上による(費用を用意できるだけの)経済的なゆとりや、定年後の第二の人生が長期化したこと、誰しもが書くことに挑める状況を生み出した物語産業の進展などがあるという。

あとがきでは、冒頭にも記した、著者自身の「人生の物語」を集めはじめた契機と同時に、今回のインタビューによって見出された語りの特徴や、自分史をとりまく現状(1997年時点)について触れられている。

書き手が自分史を口述で語るときは、「『人生』のストーリーの筋立てや過去の出来事の構成のしかたにおいて、先にあらわした書き言葉の「人生」につよく支配され」、自分史における「人生」は、客観的に、さらには作品というモノとして捉えられているという。

「作品化された自分史がもたらした波紋や、時間の経過により、新しい解釈が生じたときには、書き言葉の「人生」にも別のヴァージョンもありうるという気持ちが生きてくる」ことも明らかになったという。

また、他国の自分史ブームについては、この時点では詳しいデータは無いとした上で、日本だけのものではないことも示唆している。(その後、欧米諸国の状況については〔小林2001〕が詳しい)。

本書は、「自分史」に関わる人びとの群像、さらにいうならば、「書く」という行為が、識字率の向上や表現の自由が認められる社会になる中で、可能となった人びとの群像を描いた、エスノグラフィーともいえるだろう。皆が「文字を持つ伝承者」となり得る現代において、その人生観を探る際には外すことができない視点を、本書は投げかけている。

また、著者は最後に「自分史の動向は、個人の歴史を「記憶の共同体」に保持しようとする動き」にも通じているとし、1996年のエイズデーにワシントンD.C.にて広げられた、病死者の記憶が縫い込まれた数千枚のキルトや、「ベトナム戦争戦没者の名前を刻んだ碑」など、現代社会における「名前をもった個人へのまなざし」についても触れている。

私は、皆が自己を表現できる時代や、個人の人生が価値ある記憶として受容される社会となりつつあることについて歓迎している。しかし、個人史が、例えば戦争といった「過ち」によって増加することや、また、個人史の集合がそれらの正当化に使われたりすることは全く望んでいない。

(学陽書房 1997)

参考文献

- ・小林多寿子1995「インタビューからライフヒストリーへ」『ライフヒストリーの社会学』中野卓、桜井厚編 弘文堂
- ・小林多寿子2001「風俗としての「人生」-自分史をフィールドワークする」『現代風俗』現代風俗研究会年報23
- ・重信幸彦1993「仕事を綴る〈ことば〉の民俗誌～あるタクシードライバーのノートから～」『族』20 筑波大学歴史・人類学系民族学研究室
- ・宮本常一1984「文字をもつ伝承者」(一)、(二)『忘れられた日本人』岩波書店
- ・米山俊直、小林多寿子訳1993『ライフヒストリー研究入門』(L.L.ラングネス、G.フランク著) ミネルヴァ書房